超王党派の新聞『日々』紙を読む

田村　毅

＊『赤と黒』における『日々』紙

『赤と黒』の幾つかの場面を思い出してみよう。（以下 *La Quotidienne* を『日々』紙と記す）

ジュリアン・ソレルは家庭教師として市長レナルの家に住み込む。「年上の子供がレナル氏のいる前で『日々』紙の広告に出ている本のことをジュリアンにたずねた[1]」（第一部 7 章）　ジュリアンはこの機会をとらえて、しぶるレナル氏を説得して、共和派の貸本屋から下僕の名前で本を借りる許可をえる。

ジュリアンに愛を感じ始めたレナル夫人は心の動揺を隠すために、小間使に新聞を読むことを命じた。「『日々』紙の長い記事を読む小間使の声の単調なひびきを耳にしながら、レナル夫人は、今度ジュリアンに会うときには冷ややかな態度で接することにしようと、貞節な決心を固めた」（第一部 11 章）

前半の第一部にさりげなく挿入されているこの新聞の名前によって、レナル家では『日々』紙が講読されていること、つまり王党派であることが示され、そしてこの小さな田舎町にも王党派対共和派の厳しい対立と葛藤があることが暗示されている。

舞台がパリに移る第二部では、ジュリアンはいよいよ大貴族ラ・モール侯爵邸に入りこむが、そこでは絶対王政を復興せんとする立場から妥協的な復古王政に反対し、クーデターを企てる陰謀がうず巻いている。

「ジュリアンの見たところでは、いつも一座の話を活気づけているのは、侯爵が亡命中に知り合った二人の子爵と五人の男爵だった。この連中は年六千ないし八千フランの年金があり、四人は『日々』紙の味方であり、三人は『ガゼ

ット・ド・フランス』がひいきだった」（第二部4章）

すなわち、王党派内にも超王党派（すなわち『日々』紙側）と復古王政＝政府派（『ガゼット・ド・フランス』）の分裂抗争があることが、二つの新聞名によって暗示されている。

さらにもう一箇所だけ有名な場面を引くと、ラ・モール侯爵はジュリアンの超人的な記憶力を聞きつけ密書を暗記させて託そうとする。ジュリアンはその記憶力を証明するために侯爵がもみくちゃにした『日々』紙を拾い上げ、「今日の『日々』紙はあまりおもしろそうではありませんが、よろしければ明朝すっかり暗唱してごらんにいれましょう」といい、実際に身支度を整えている間に、第一面をおぼえて暗唱してみせる（第二部21章）。

以上見てきたように、この小説の中で『日々』紙は、前半ではさりげなく用いられて、小道具のようにもみえるが、第二部では王政復古期の社会史を描くのに不可欠な政治思想の象徴としての重要な役割をはたしている。

この新聞がバルザックの小説にもしばしば登場することは言うまでもない。1820年代の日記、書簡、あるいは当時の回想録（シャトーブリアン、ヴィニィ、ユゴー、バルベー・ドールヴィイ、等）にしばしば引用され、『赤と黒』と同様に、購読者の思想的傾向を象徴的に示している場合が多い。『日々』紙が実際にはどのような新聞であったのか、以下にその概要を紹介しよう。

＊『日々』紙 *La Quotidienne*（1792-1847）

革命のさなかの1792年9月に創刊された王党派の新聞『日々』紙は、革命期から帝政にかけて幾度も廃刊の憂き目にあいながらも、そのつど名前をかえて再刊された。王政復古とともに、当初の『日々』紙の名前に戻り、絶対王政の再建を夢み、超王党派（ユルトラ）の思想を誇示する激しい攻撃的な論調で知られ、「血塗れの尼さん」とあだ名されるほどであった。その編集主幹はジョゼフ・ミショー Joseph-François Michaud（1767-1839）であり、編集・執筆陣にはロランティ、ラ・アルプ、ノディエ、ヴェロン、ジャナンらの名前が見いだせる。この新聞がもっとも脚光を浴びたのは、1822年頃から七月革命までであり、その後1847年まで続くが、七月革命以降は時流に抗せず、次第に勢力を失っていった。

＊ヴィレール内閣による言論統制

1821年年末にユルトラの首領ヴィレールが政権を握り、反動的な政策をつぎつぎにうちだす。新聞の事前許可制度の導入（1822.3）、王党派の作家シャトーブリアンを外相に任命し（1822.12.28）、スペインの王位を守るための派兵（1823.4）、その勝利を好機に、リベラル派を抑えるためユルトラ派を上院議員に任命し（1823.12）、下院を解散、24年2月の下院議員の選挙ではユルトラが圧倒的な多数を構成する。ところが、亡命貴族への十億フランの賠償金の支払い、そのための年金（国債）利率の5%から3%への引き下げ、それに反対する外相シャトーブリアンの罷免（1824.6.5）、徴兵期間を8年間に延長（1824.6.8）、キリスト教教育を重視する宗教・教育省の新設（1824.8.26）、等々、ヴィレールの強引な政策に対して、リベラル派のみならずユルトラ派も反対の論陣を張り、その先頭に立ったのが『日々』紙であった。

ヴィレール内閣は、1822年3月以来、新聞検閲制度を廃止する代わりに、王と宗教の威信を冒涜するものを罰するというあいまいな「（思想的）傾向裁判」によって言論統制を試みるが成功しない。リベラルとユルトラの両陣営の新聞からの攻撃に対して、ついには新聞検閲制度を復活した（1824.8.15）。他方ではつぎつぎに新聞を買収し、編集陣を入れ替え、政府の御用新聞に仕立てていった。王室費、内務省の機密費から資金がだされ、議会での質疑応答報告（1824.7.12）によると、総額二百万フランにもなった。政府買収の対象になったのは、『フードル』、『王旗ーレギュラトゥール』、『白旗』、『ガゼット・ド・フランス』、『ジュルナル・ド・パリ』ら、主にユルトラ紙であった[2]。つまり新聞所有者には金を渡し、編集・執筆者には年金あるいは地位・ポストを与えたのである。

『フードル』は1823年11月30日に、『王旗ーレギュラトゥール』は1824年2月15日に買収され、廃刊になった。後者の購読者は40人しかいないのに、買収には三、四十万フラン（一説に二五万フラン）が支払われるという、奇妙なことが起こった。そしてその数ヶ月後の7月には、『王旗』として再刊されている。

＊『日々』紙買収工作の失敗

『日々』紙も買収の対象になっていた。総株数12のうち、ミショーが4株、ロランティが4株、ボノーが5株所有してしていたが、ボノーはすでにヴィレールの配下に入り、ロランティ Pierre-Sébastien Laurentie （1793-1876）も警察庁高官と大学視学の兼務に任命され、15万フランで持ち株を政府に売り渡したようである。ところがミショーだけが頑として拒否したため、カづくで編集長の座を追われ（1824.6.11）、1824年6月12日には、ミショーのものとは別に、御用新聞化した『日々』紙が並行して発行された。しかし、ミショーは裁判で勝訴して編集主幹の座を取り戻し、6月26日にはミショーの『日々』紙は再び発行された。同紙の政府攻撃は一層激しくなった[3]。

さきに引用した『赤と黒』第二部で描かれた王党派内の二派の対立、つまり『日々』紙と『ガゼット・ド・フランス』の色分けとは、政府に買収された御用新聞である『ガゼット・ド・フランス』と、買収に頑強に抵抗したユルトラの『日々』紙の対立の図式を示すものであることが明らかになる。

＊購読者数

1824年12月15日における各新聞の購読者数を示そう[4]。

＜反政府紙＞ 『デバ』（13000）、『日々』紙（5800）、『アリスタルク』 L'Aristarque（925）、『コンスティチュショネル』（16250）、『クーリエ・フランセ』（2975）、『商業新聞』 Journal du Commerce（2380）、合計41330。

＜政府御用新聞＞ 『ジュルナル・ド・パリ』 Journal de Paris（4175）、『エトワール』（2794）、『ガゼット・ド・フランス』（2300）、『モニトゥール』（2250）、『白旗』（1900）、『ピロット』（925），合計14344。

この表からは、買収にもかかわらず、政府批判新聞が圧倒的な購読者をもっていたことになる。つまり、購読者数の多い『デバ』や『コンスティチュショネル』は、政府も買収のしようがなかったのである。

＊ジェラール作「『日々』紙の埋葬」

まだネルヴァルと名乗っていなかった頃の少年詩人ジェラールが、1824 年から 26 年にかけて書いた長編英雄叙事詩「『日々』紙の埋葬」の草稿は、長い間未発表であったが、近年やっと発表された。『日々』紙を英雄に見立ててパロディ化した「英雄滑稽詩」であり、当時の王党派新聞と共和派新聞の抗争を戦記風に描いている。この長編詩についてはすでに別項で書いたので、ここでは省略する[5]。

以下に、『日々』紙から特徴的な記事を選び、翻訳して示すことで、スタンダールやバルザックの小説の背景にある王政復古期の特異な政治社会情勢を理解する一助としたい。94 年度の大学院ゼミでは、前半が「『日々』紙の埋葬」の読解、後半に『日々』紙の記事を読んだ。特徴的な記事の選択と翻訳はゼミに参加した院生によるものである。

1 Stendhal, *Le Rouge et le Noir*, Classique Garnier, Bordas, 1989. 桑原武夫・生島遼一訳（河出書房新社、世界文学全集 3、1959）参照。

2 voir Eugène Hatin, *Bibliographie historique et critique de la Presse périodique française*, （ reproduction, éditons anthropos, 1965 ）, p.352.

3 *Histoire générale de la Presse française*, tome 2 （ de 1815 à 1871 ）, 1969, pp.74-77.

4 Ibid., p.76.

5 「復古王政下の超王党派の新聞 ― 『日々』紙について」、『ネルヴァル手帳』、2、1995。（新聞に関する説明の一部は本稿と重複する）